

2012 12/25

No.1937

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



三浦海岸（三浦市）の浜辺で、冬の風物詩「ダイコンの天日干し」がピークを迎えている。風通しがいい浜辺で干すと、水分が早く抜ける上、凍りにくいという。天日干しの作業は来年2月中旬まで続く。



政経かながわ

2012 12/25 No.1937

contents

視点・点描	3
足元に鉱脈、宝の山に注目	
講演録	4
「米大統領選挙とこれからの日米中関係」 東京財団ディレクター(政策研究)兼上席研究員 渡部 恒雄	
コラムcafe	9
ダブルスタンダードの勧め 生活保護引き下げか	
政治	10
安倍政権に「五つの壁」 衆参ダブル選は16年に？	
くらし2012	12
後発品促進は差別？	
広告珍談	14
～うまい物がたり⑤ のんべーのツネ	
経済反射鏡	15
世襲の成否は番頭次第 日本勢、ウォン高で反攻	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2013年1月21日(月)

14時～15時30分

横浜情報文化センター情文
ホール

講師は東京大学大学院総合文化研究科教授(日本文学担当)のロバート・キャンベル氏
演題は「はじまりは坂の途中で～日本文学から日本人について学べるものとは？」

◇横浜定例講演会

2013年2月22日(金)

13時30分～15時

崎陽軒本店

講師は東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻教授 戸堂 康之氏
演題は「つながりによる経済成長～産業集積とグローバル化」

視点 点描



足元に鉱脈、宝の山に注目

鳥を狙った施策として県が発案。伊勢原市がモデル事業第1号自治体として名乗りを上げた。

冒頭に触れた「宝の山」とは、

伊勢原市が来春からリサイクルのルートに乗せようという、使用済み的小型家電を指す。私たちの生活を豊かにするこれらの利器には、ハイブリッド車や高度な電子精密機器の製造に欠かせない希少金属が使われる一方で、廃棄後はその多くが埋め立て処分されており、「日本は資源小国」と嘆きながら、身近にある貴重な資源のリサイクルは十分とはいえなかった。

希少金属など有用金属の含有量は28万トンにも及び、金額に換算すると844億円にも達するというから、驚きである。

今回のモデル事業は、小型家電の回収を促すために来春施行される小型家電リサイクル法を先取りする形で打ち出された。その意気込みはすばらしい。ただ、使用済み的小型家電の一つ一つに含まれる希少金属は微量であり、資源循環の実を上げるためには大量の廃棄家電を集める必要がある。この事業が県内の他の自治体にも広がることを期待したい。

「宝の山」が足元にあるのに、多くの人がその存在にさえ気づかない。もったいない限りだ。こんな「つばやき」が、どこからともなく聞こえてきそうである。12月11日付で神奈川新聞が報じた、県と伊勢原市による希少金属（レアメタル）回収のモデル事業開始の記事を読んだ感想だ。

1面を飾った記事などによると、事業の主体は伊勢原市。回収

の対象とするのは家庭から出る家電ごみのうち小型家電（携帯電話、デジタルカメラ、携帯音楽プレーヤーなど5品目）で、集積所から月2回、市が回収し、希少金属が含まれる基板などを取り出してリサイクル業者に引き渡すという。家電ごみの分解・分別には市内3カ所の福祉事業所に通う障害者が当たる。資源循環の推進と障害者の社会参加の促進という一石二

使用済みの家電に含まれる有用な金属を鉱石に見立てて、「都市鉱山」の有効活用が叫ばれているのも、こうしたお寒い現状が背景にある。環境省によると、日本で1年間に使用済みとなる小型家電の量は65万トン。このうち、金や

希少金属再利用の意義が理解されれば、消費者の手元で眠ったままの「鉱脈」の発掘にもつながるはずだ。宝の山の住人の、つばやきに耳を澄ませるときである。

（神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也）

のんべーのツネ

まずビールを一杯！これがのんべーの常道。こんなにうまい、われらが日本のビール。だが、いつ、どこでつくったのだろう。

先年、神奈川県立歴史博物館で展覧会《日本のビール》を見た。サブタイトルが『横浜発 国民飲料へ』のように、最初のビールは横浜山手で誕生した。

1870（明治3）年、アメリカ人ウイリアム・コーブランドがつくった。ノルウェー生まれでビール醸造の知識があつた彼は、天沼のわき水がビールづくりに適している、スプリング・バレー・ブルワリーを創業。できたビールは、アマヌマ・ビヤザケと呼ばれて、東京や長崎へ運ばれた。上海から香港まで、もたらされたというからみごと。

しかし、「日本製のビールは臭気ありと、是他なし人糞を肥しに用ゆる故なりとぞ」と新聞評。開港以来、輸入

ビールになれてきただけに、なにかと批判も多かっただろう。

日本人がビールをつくったのは、横浜ではなかった。72（明治5）年3月、大阪堂島の綿商桜井屋・渋谷三郎がアメリカ人フ



蔵の十一屋・野口正章は京都に向いて、ドイツ人ワグネルから醸造法を学び、72年には横浜からコーブランドを招聘。74（明治7）

年、「三ツ鱗ビール」を発売。この新聞広告を掲出した。麦酒にビールとルビをふって、なんとも

ツの製法を折衷して、「皇国人ノ嗜好ニ適スル」ビールを昨年から醸造。ようやくお気に召すものが出来たので発売します。

おなじ年12月、すでに洋酒をつくっていた「橋本ビール」は、麦でつくったビールはうまいだけでなく、健康に良く、胃病にもよろしい。西洋では、百薬の長といえます。これまでは高価であったが、当方で醸造したビールは安く、ほかの製品よりも優れています。「從來製造する他の洋酒」とともに求め下さい。

当時、ビールは大瓶1本20銭から35銭。日本酒（上等）1・8リットル4銭。ビールはたいへん高価であった。安くなった92年でも14銭。その年、日本酒は21銭であった。

素朴なイラスト。翌年、京都博覧会を受賞した。大阪では、競いあつてつくった。広告からそのビール合戦を見よう。82（明治15）年3月、「浪花麦酒醸造所」は、イギリスやドイ

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
（図）山梨県産「三ツ鱗ビール」の広告・1874（明治7）年、東京日日新聞掲載